

## 平和聖日

八月第一日曜日は、平和聖日として、平和について考え、過去の戦争の過ちを忘れないように、風化されないようにと覚えてずっと礼拝をささげようとした。今年も去る八月一日（第一主日）平和聖日として礼拝をささげました。奈良昌人牧師より、「キリストは私たちの平和です」というメッセージをいただき、午後からの「平和を語る会」では、3人の提言を、そして、シンガーソングライター 山本さとしさんをお迎えして平和コンサートが開かれ、平和について思うところも大切な時間を過ごしました。

## 伝えよう 戦争の恐ろしさ

### 太平洋戦争

仁田 秀子

戦争は、人の気持ちを異常にかり立てる恐ろしい力があると思います。ひとつの例として自分の父のことを話します。私の父はたいへんな愛国者でした。その頃のいかにも強そな戦争をしている日本が大好きだったので。父の職業は教師で、昭和13年頃は中学校の校長になっていました。当時の中学校は男子校です。そこで父は情熱のありつたけを注いで、お国のためになる青少年を育てました。生徒の中から少年航空兵になるための学校や幼年学校を希望する人が出ることは大賛成だったようです。また今のインターハイに当たる全国中学校競技大会には国防競技という軍事教練のような種目があって、それに優勝した時の喜び方は大変なものでした。ただし父の気持ちはそのままで物足りなく、もっともつと積極的に国の役に立ちたいという思いが強くなっていったようです。昭和17年頃、文部省と軍が海外の青少年を教育するための中等学校の教員を募集しました。47才になっていた父は、直ちに応募したのです。父の志願は叶って陸軍の軍医になってジャワへ行くと決まりました。当時は中年男性や体が弱いため軍人にならないでいた人たちにも、どんどん召集令状がきていて、どんなにいやでもそれを拒む事は非国民という時代でしたが、父の場合は全く違う、その立場のままの仕事を当然なのに自分の意志だけでまるで違う環境に飛び出してしまったのです。我が家には15才の姉を頭に6才の弟まで2人男3人の子どもがいましたから、父の行動を知った親戚や親しい知人は驚き呆れました。なぜ反対しないのかと母は多勢の方に聞かれたようですが、父の決心が固く止めても無駄なことは良く解っていたはずですし、子どもが親に反対することなど、できない時代でもありません。

40人  
93人  
平和を語る会  
主礼 平和  
出席

昭和18年10月18日、父は陸軍将校の軍服、腰に日本刀

を吊った姿で出発しました。肩書きは陸軍司政官でした。2か月もかかって今のインドネシア、ジャワのパニユマス州という所に赴任した父は、希望した教育の仕事に取組みました。その土地は日本軍の占領下にあつて、もう戦地ではなく穏やかに暮らせたようです。時々来る葉書はすべて検閲済みのゴム印が押され、角の一隅は切取られていました。発信番号が書いてあつたと思われず。内容は家族を思う気持ちにあふれていました。父はその時代の男親としては子煩悩だったのです。日本に暮らしていた時は健康だった人ですが、昭和20年2月にマラリヤにかかり高熱が続いて、その月17日に亡くなってしまいました。しばらく通信が途絶え、心配していた我が家に父の死を知らせてくださったのは、全く知らない民間の方です。ジャワからは一緒に働いていた方達によって、遺骨、遺品を船に乗せていただいたのに、その船は台湾沖で米軍の爆撃を受けて海に沈んでしまいました。戦病死の公報が入ったのは戦争が終わった翌年の4月、遺骨が海に沈んだことが解つたのは幾年も経ってからのことです。私達の元に父を偲ばせる物は何一つ戻ってくることはありませんでした。父が大好きでたまらなかつた日本が負けて戦争が終わつたことを知らずに死んだのは、せめてもの良かったのかと母や私たちは思つたのでした。

## おそろしい戦争

5年 根岸 咲和

私は、いつもこの時期になると、戦争について、平和について考えます。いつも忘れていくわけではないけれど、毎年この時期に学校で、戦争についてのビデオを観たり本を読んだり、また戦争のお話をしていたりするからです。その中で、最近、特に私の心に残つたのは、捜真小学校の元校長先生だつた天野昭一先生がしてくださつた横浜での戦争のお話でした。天野先生は、いつも戦争のお話をしに来てくださいます。でも、いつも違うお話をしてくださいます。今年も、横浜大空しゅうのお話に加えて、アメリカ軍のことも話してくださいました。横浜大空しゅうの時は、私が住んでいる東神奈川から、学校がある中丸までが丸焼けになつたそうです。その光景を思うかべるだけで、とてもこわくなりました。さらに、消防防車までが全焼してしまつたと聞いて、どんなに大変だつたことだろうと思ひました。また、アメリカ軍が、どうやたら日本を早く降参させられるかを、細かく調査して計画を練つていたと聞きました。原子爆弾という爆弾ができた時も、どこに落とすか会議をしていたそうです。その候補地に横浜が入つていたことにびっくりしました。お

話を聞いていて、横浜に原子爆弾を落とすことにならなかつたときには、ほっとしました。でも、広島や長崎には原子ばくだんが落とされ、たくさんの方がなくなつたり、けがをしたり、悲しい思いをしたりしました。何年前かに、広島でげんばくにひばくした春風みおさんという腹話じゆつをする方のお話をきいたことがあります。春風さんは、げんばくの熱でやけどをして、かた目が見えなくなりました。なくなつたお母さんのい体を、お見さんと2人で川原で焼いた記おくがづらくて、ずっとずつと戦争の話はできなかつたそうです。春風さんのように、今でも悲しくて悲しくて仕方ない人がたくさんいるのだと思います。天野先生のお話の他にも、えい画の「火垂るの墓」を観たときも、最初はみたくない！と思うくらいこわくておそろしかつたです。戦争中は、いつどこで死んでしまうかわからないので、本当にこわかつたと思います。担任の中川先生に「語りつく戦争体験」という本を読んでいたときも、戦争はともにおそろしいと思ひました。多くの人が集団で自殺してしまつたのは、とても残念で悲しいことだし、日本軍の人たちも日本軍の人たちで、自分たちのことしか考えていないのはおかしいと思ひました。戦争が人の心まで変えてしまふのだと知つたとき、おそろしい、こわいではすまないような気持ちになりました。今でも、世界ではたくさんのおこで戦争が起つています。日本も全くなかかわつていないわけではないと思ひます。どうしたら戦争がなくなるのか？考えてみてもはつきりわかりません。でも、まず、みんなが自分のことだけを考えずに、相手のことを理解しようとしなかつたら、絶対に戦争はやめられない気がします。世界が平和になるためには、自分のことだけを考えずに、相手のことを考える、そして、私たちにできることは、神さまに祈ることだと思ひます。そうすれば、戦争はなくなると思ひます。私は、1日でも早く世界が平和になることを祈ります。



# シャロームタイムズ

## 平和聖日

野本 香矢子

私は長崎の佐世保市で生まれ、福岡で育ちました。そして私は被爆者二世です。原爆を受けた親から生まれた子どもという事です。私の両親は長崎で生まれ育ちました。父は14歳のときに被爆しました。73歳の今も健在ですが、母の姉は原爆で亡くなりました。母の兄も同じく被爆しましたが、特に後遺症もなく暮らしてまいりました。まず私の父の体験をご紹介します。娘の爽生が小学校5年生のときに原爆に興味を持ち、夏休みの課題で調べていたときに、父が送ってきた手紙です。

遅い朝食でした。箸をとった途端、青白い閃光とグアーンという轟音とともに、戦時中とはいえず平和な風景が一瞬視界から消えてしまいました。爆音が聞こえていたので、爆弾が近くに落ちたのだと、反射的に床に身体を臥せしました。「助けて」という叫び声で数秒続いた不気味な静けさが破られ、それが引き金になったようにあちこちから助けを求める声が上がりました。周囲の形のあるものがすべて見えなくなり、午前中なのに夕闇に包まれたようになりました。額から血がしたたっている母と共に裏山の中腹にあるボウキ畑に避難してそこで一夜を過ごしました。長崎駅付近のくすぶりが、手の施しようもない火勢となり、瞬く間にその猛火は私の家を呑んでしまいました。翌朝は跡形もなく灰塵に帰した我が家の跡に突然と付むけだけでした。ボウキ畑で過ごした夜中に、焼きただれて垂れ下がった皮膚が、衣服に間違えらるるほど悲惨な姿で山道を這うようにしてやって来た人達がいきました。水を求めていました。畑の片隅にある小さな溜池に口を近づけたまま息絶えてしまいました。救いを求める声は聞ききれない言葉でした。朝鮮半島から強制的に徴用され軍需工場で働かされていた韓国人達でした。

私の1945年8月9日

早田 一男

私は8年前に悪性の腫瘍を患い、手術で摘出しましたが、後遺症に悩まされ、また転移の不安から解放されない日々を送っています。原爆の放射能は心と体を一生蝕んで生存被爆者をも苦しめるのでしょうか。長崎の街は正しく生き地獄と化していたのです。

この手紙を読み、娘は本当にこのような体験を祖父がしたということが信じられず、「おじいちゃん、こんなに辛い体験をしたのに、どうして今何事もなかったように笑っていられるのかなあ。辛いのかあ。」と、私に聞いてきたことがあります。私はつい、「辛いに決まっているけど、時間が少しずつその悲しみや辛さを忘れさせてくれるの。そうではないと人間は生きていくことができないんだから。」と返っていました。すると、すかさず娘は、「それじゃだめじゃん！忘れちゃだめじゃん！伝えていかなくちゃいけないじゃないの！」と言いました。そうです。伝えていかなくちゃいけないのです。父も決して戦争の悲惨さを忘れたわけではありませんが、英語が話せて、比較的まともな夏休みがとれた高校教師という立場を利用して、父は長く国内外で平和活動をしてまいりました。世界から核兵器をなくそう、憲法九条を守る、父は様々な活動に参加してきました。しかしやがて、そうした父もこの世からいなくなるときが来るでしょう。そして戦争を経験した人すべてがいなくなるときがやってきました。私たち戦争を知らない世代ばかりになるでしょう。それでも私たちは、戦争の悲惨さ、苦しみ、虚しさ、愚かさを、実際に体験していかなくとも伝えていかなければならないのです。今私たちは、戦争から遠くかけ離れた豊かな生活を送っています。戦争は遠い国の話のことだと考えがちです。でも人間は放っておけばどんどん傲慢になってしまいます。私利私欲

に満ち、自分さえよければそれでいい、人を憎んだり、妬んだり、友達を平気で傷つけたり・・・そんな小さなことがたくさん、たくさん集まると、それは大きな罪となってしまうのです。ひとつひとつは小さなことが大きな罪を犯してしまふのです。だから私たちは一日一日を大切に、自分のことだけでなく、人のことを思いやりながら生活していかなければなりません。そして実際に体験していかなくとも被爆者の悲惨さ、戦争のおろかさや必死で死んで伝えていかなければならぬのです。

最初に申し上げたとおり、私は被爆者二世です。被爆者の子どもです。横浜市では、申請することによって被爆者の子どもでも、横濱市では、申請することによって被爆者の子どもでも、限られた病気の場ですが補助も受けられます。被爆者の子どもは白血病になりやすい、結婚がだめになったなど偏見にさらされているということも何かで読んだことがありました。私も初めは熱心に健康診断を受けていました。最近ではこの手帳の存在すら忘れていました。しかし父も年老いてきた今、被爆者の子どもである私が、父が一生懸命訴えてきたことにきちんと向き合い、学び、今を知り、そして伝え、私たち皆が共に「平和」「命」について考え、行動していかなければならない時がきたと実感しています。平和は与えられるものではなく、絶えず求め続けなければ得られないものです。今回お話をさせていただく機会をいただき、改めて自分自身がたかさんのことに気づかされたことに感謝しております。

### 広島（ヒロシマ）

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分、原子爆弾リトルボーイは、第33代アメリカ合衆国大統領ハリリー・S・トルーマンの命令を受けたB-29（エノラ・ゲイ）によって投下されました。

### 長崎（ナガサキ）

広島の日後の1945年8月9日午前11時2分、B-29（ボックスカー）が長崎市に原子爆弾ファットマンが投下しました。

